令和7年3月31日

令和6年度の教育活動等に対する学校評価書

学校法人千葉学園千葉幼稚園 園長 岡本潤子
学校法人千葉学園千葉幼稚園学校関係者評価委員会

1. 教育目標　大人も子どもも共に『よくみる よくきく よくする』

八戸に生まれ日本人女性初の新聞記者であり教育者羽仁もと子の言葉を教育課程に織り込みながら、のびのびとした明るい環境の中で人とのふれあいを大切にし、毎日の生活を丁寧に『よくみる よくきく よくする』人に。大人も子どもも共に学び合いながら。

2. 本年度取り組んできた重点目標

教育目標、教育内容の充実のために、教職員自ら、主体的に対話的に教育実践を行う。そのために「子どもの声を生活に活かし、子どもと共に作り上げる生活」を実践する。

① 子どもの姿、声から、どのように保育計画につなげるか。
② 子どもとの生活を大切にした教育⇒振り返りの時間の持ち方
※**自己評価**にて振り返る
③ 子どもの願いや思いを活かした教材研究 ⇒幼児教育の「今」を、保護者や社会へ発信する。 ⇒ICT の活用

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

評価項目	自己評価			学校関係者評価	
	評価	取り組み状況	取り組みによる成果	評価	意見
「子供の姿、声から、どのように保育計画につなげるか」 『子どもとの生活を大切にした教育』 ・振り返りの時間の持ち方	B	・自己発揮や社会的発達を促し、安定した情緒で園生活を過ごすことができるよう、子どもたちの言葉を引き出す場を増やしたり、子どもたち同士で話し合うことができる環境を意識して設けてきた。（文字やイラスト・自然物など年齢に応じた教材を工夫する。） ・子どもたちの興味や遊び込みの状況に応じて、取り組む時間を十分に確保したり、保育中の経験から派生した遊びや、学びが深まるような姿を教員間で話し合ったり、他学年への刺激となるよう情報共有をこまめに行う。	・子どもたちのコミュニケーションが広がる場づくりを意識して保育の中に取り入れたことで、子どもたち自身の思いへの理解が深まった。 ・子どもたちの姿に応じて、保育計画を柔軟に変えたり、挑戦してみたい気持ちを支援するための教材研究ができた。 ・「保育プロセスの質」の評価スケールを使っての自己評価を実施した結果、子どもたちが以前に探求した経験を思い出したり、そこから展開をしていくという視点を、保育計画に含めたことがなかったことに気付くことができた。	A	・その子なりの表現がそれぞれ違う中、様々な援助の方法で一人ひとりに対応しつつ、集団の力も活かしながら成果を引き上げていくのは、幼児期の教育で特に大切なことの一つ。子どもたちが安心して園生活を過ごす中で、言葉や思いを表現しながら経験を積み重ね、次へつなげたり挑戦したりすることが、自然と行われるよう教員が援助したり、子どもの「今」の姿に合わせて教育内容に組み込んで行くことで、より深い学びに繋がる教育を実践してほしい。
『子どもの願いや思いを活かした　教材研究』 ・幼児教育の「今」を保護者や社会に発信 ・ICT の活用	B	・子どもたちがどのような過程で遊び、人と関わっているか、またそれがどのような成長につながっているかを、連絡帳や発行物を介してのやりとりや・ICT を使って保護者だけではなく広く社会に見ていただけるような情報発信を実践する。・本年度は創立 70 周年であることから、周年行事として発信する内容にも活かす。	・具体的な伝え方の工夫により、幼稚園で子どもたちが取り組んでいる過程、また、教員がどのように援助をしているかが伝わっていることも実感でき、研修の成果を感じることができた。（「ひまわりっこがんばり表」や保護者との会話、連絡帳より） ・保育におけるタブレットの活用方法、子どもたちの反応、反省点などについて話し合うことにより、より良い指導方法や、具体的な実践方法に気づくことができた。	A	・子どもが心身共にどのような現状にあるのか、園でどのような取り組みをしているのか、教員がどのような援助をしてくれているのか、そのようなことがわかってこそ、園と保護者が共に行う「教育」へとつながっていく。その理解を得るために様々な方法で情報の発信にチャレンジしているのは、大変良い取り組みであり、今後も工夫をしながら続けてほしい。

4. 総合的な評価結果 （A：十分に成果があった B：成果があった C：少し成果があった D：成果がなかった）

評価	理由
B++	園内研修を通して援助の工夫について話し合い、実践し、子どもの現状・変化に応じて取り組みを考えるという循環サイクルができたと同時に、教員自身が様々な視点を取り入れる意識の高まりを感じた。また、具体的な伝え方の工夫により、幼稚園で子どもたちの頑張りの過程が伝わっていることも実感でき、研修の成果を感じることができた。 しかし、ICT に関してはまだまだ実践が足りず、手応えを感じる場面は少なかった。機会を見つけて新たな取り組みにチャレンジしてきたこと、そして具体的な目標や課題点が見えてきたという点では次年度につながる成果が得られた。 園では B と評価をしていたが、学校関係者評価委員会から十分な成果が認められたことから、限りなくAに近いBとするよう意見を得た。

5. 今後の課題と具体的な取り組み方法

来年度への課題	来年度の具体的な取り組み方法
「質の高い教育は子どもたちへの贈り物」 ①0 歳児からの教育環境を学び実践する ②これまでの「千葉幼稚園の当たり前」を令和時代の中で再考する ③保育を豊かにするための ICT の活用を学ぶ	①幼児教育の質向上のためには、0 歳児からの教育環境を考えることが大切であることから、園内における 0 歳児の教育環境を未就園児親子教育「クレレ01」の運営実施を通して考え、学ぶ。 ②当園が大切にしてきた教育内容への保護者参加の意義や内容、および方法を令和時代の社会の中で再考する。 ③本年度の反省を活かし、積極的に保育の中で実践する。